



無題



i r m i q

カラヴァッジョの手に審(つまび)らか獣の死 人の市では聖者なりしも

打たるもの侵されしもの逐はるものいまだ人にもあらでひかりぬ

悲しめるこころのあはれかなしみも忘るかなしみ魔こそかなしき (怒りについて)

ふっと胸にながれつきけり遠洋をめぐりて今宵わが桜桃忌

「恥多し」いかにや他人(ひと)の傷あまた悲しめる君か 道化、太宰よ

(地獄とは、天の器にほかならない。「...化物、よし。」 然も底知れぬ人のこころの闇に果てしもなく寄り添い続ける人を偲ぶ。「思い煩うな。空飛ぶ鳥を見よ。播かず。刈らず。蔵に収めず。」)

心臓を手に取り出だし血もて詩を綴りし友に月を呉れたし

言語野のほかにも領土を持たざりし人の詩として空、怒濤なり

人間に黙秘たもちてやさしかり空の碧(みど)りも死の羽博きも

敗れしときせめてと君のねがふるに応(いら)へのありてふれる星かも

黒旗揺る 国旗の裏手楽隊とともに人種も問はざる夜ぞら

弦の音の実りつつありわれの眸にゆめよりほかは持たざりし君

鬼灯で成る市あらば城もあれ

風止んでよし紫紺野牡丹唄ふに

汝がひたひひかりこそふれかくねがふとき手に礫さへもいとしき

中島敦：幾萬年人生(あ)れ継ぎて築きてしバベルの塔の崩れん日はも

くちづけのごとしバベルの万基建ち墓おぼほゆも陽の注がるに

中島敦：ゲエテてふ男思へば面にくし口惜しけれどもたふとかりけり

おのが脆さなげくこころのあればこそゲエテに類し君たふとかり（中島敦と友に）

no title

国と国の境に野ばら植ふる人あり 彼の地、幻想に吾は家が欲し

受けたる傷〈享く〉と記して目つぶれば銃口に白薔薇さす人ら

(題詠二首：小川未明「野ばら」)

ただひとつ生きてなすべきことありて主よみこころのままと祈らず (津田治子)

「祈らず」と人のつくりし神に詩を興すとき斯くも人のまぶしき

「祈らず」と敬虔のほど祈りみし汝に攫(さら)はるさきはひもあれ

二十一世紀人はいかなる歌を書く 九十年生きてわれはこれだけ (斎藤史)

一世紀ちかき孤独が歌のみと化りて吾に植ふ秘呪のさやけき

夏の庭の祖母ぞかなしき 母の敵、等しく兄の敵にも生(あ)りしを

死の灰の映画の終はり描かれぬ愛を詠ひきありし日の祖母

秋霖のなぐさみ深しさびしかる兄の少年なほ立つ窓に

かがやきをあつめて稚魚のいのち手に母は筥(ざる)もて佇みゐたり

かなしみのひとと記して音もなく枇杷採る母の背に寄する風

釘煮、春ちさき魚らかがやきぬ死してなほまた黄金のいのち

いとけなきいのち触るほど絶へずしてゆびのまにまに零る声明(しょうみょう)

天球儀やすけき人の叙事詩いまやさしき疵を纏ひつつあり

鍋に魚、菜屑、言葉を煮詰めつつ激昂いまも殴たる児のゐて

自由、自由なき夜に翅を動かせり腕ちぎらるる夢を溺れつ

静いに耳を澄まして児らねむれり虚偽の凱歌の明るさなぞり

ブルースハーブに遠くも近く父老ひぬ睨(ね)めどわが手に魔弾虚しき

あこがれも虚妄も断ちて売らば以後ブルースの遺児のためのララバイ

信仰としてアーク放電見つめたりわかものは群れ逃れつづけて

妻帯せず猫と常世に棲みつきて 次男、次男も辞して男娼

擦り切れしズボンの裾はあきらかに吾より優しき人の型持つ

無言もてことさら歌のきはだてり自殺の似合ふ友の画帖は

永福町商店街の夜に棲む寺山修司の死と詠ひたし

見るからにピエタ狂へる叫びなり狂へる父と児にもしづけき

叙事はみな雪の辺歩(あり)く道なき詩またやはらかに春の鐘鳴る

夙めて啼くは黒き鳥 御先あらはす黒き鳥

鳥に一あり 鳥なら 一すじ風を呉れんさい

門に一あり 門を 外して御世に遊びんさい

世々の歌びと 唄ふには 人世は常の花盛り

おからずさんも 唄ひます 常夜も一夜愛し夢

つとめてなくはくろきとりみさきあらはすくろきとりとりにいちありからすならひとすじかぜをくれんさいもんにいち
ありかんぬきをはずしてみよにあそびんさいよよのうたびとうたふにはひとよはつねのはなぎかりおからずさんもうたひ
ますとこよもひとよいとしゆめ

今年春、ご縁に恵まれ招かれた紀伊田辺。その後、知ることになった熊野牛王印の鳥文字に寄せて。――遊女に誠あれば晦日に月が出る。――さらに後日、あらためて高村光太郎「淫心」を読む。生の根源的な美の縁とも言える性愛の恩寵が、その歓びが、いまだ隠れがちにある不思議を思う。また、それに纏わる幾らかが身を竦めるようにしてある不思議を思う。「不思議ではない。あなたの美しさは。」 そう伝えたい人が、私には幾らかいる。古より〈受苦の愛〉と名指されてきた性愛、すなわち〈エロース〉に限ってのことではない。人の顔に、四肢に、仕種に、沈黙に、言に尽くし難い美が息衝く。美は常に清冽な歌のごとく息吹き、息吹き続け、その人へ、またその人の愛する人々へ巡る。巡り続ける。なにかしらの悲喜劇のうちに有る無しを問わず、人は常に人智及ばざるところの美に謳われている。――もし、あなたのそれをだれも見なかったとしても。――かつて、私は路上で似顔絵描きをしていた。似顔絵描きをする際、私は、幾度も幾度も、人の美しいことに驚いた。その日その時、ひとときばかりの対面であるため、真向かいに坐る人がどんな人か、どんな人生を歩んできたか人であるかはよく知れない。なかには前科を持つ人もいたかもしれない。けれども、どの人の表情も、驚くばかりに美しいのだ。その面持ちが晴れてあるか曇れるか、そうしたことも一切問わぬ不可思議の美を、どの人もが湛えてあったのは確かである。「美しい。あなたは」 どうしてもそう伝えたい人が、私には幾らかいる。幾らか。――筆記中断。纏めきれない。まだまだ、書かねばならぬことがある。戯曲風にしてもよい。小説風にしてもよい。あの人の、彼、彼女らの美しさを、だれかしらどこかしら、いつか伝え得るのなら。

生き動きまた在ることの悲しきにあれよヴェイユにうたはれし薔薇

**

歌にするほどのことばもなし人と謂ふ種の児らの血の喃語(さざめき)に

正義といふ十字背負ひき齒にま青(さを)の毒を仕込みて論戦はす人

人を花に喩ふも花のしなやかさ眼に児らかなしこはれやすきに

傷の喋ることば一縷の歌ならん肌膚ひとひらに深きほどいのち

急かるも追はるも昼はゆめなりき夜かなしみをうつつ噛み締む

地に遠き歌かもしれぬ地に足のつかぬがために希望むさぼり

夢訊かばまばゆき鳩を二羽三羽撃つ悪夢(ゆめ)あれり荒野の児には

ひとひとり傷つきて消ゆ月の血の重きに叛きその軽やかさ

踊り子の足裏(あうら)なぐさみたまへ春あをきかざりに野に狂ほしき

いまだ名も持たざるわかれ漂へる香は林檎に似しやその毒

奥歯もてましろき毒を噛みつぶすせかいの終はり知るかのやうに

天秤にいのちの軽さ告げられし人がかほりに得るとふ翼

うたはれるべくしてあれりいのちなり嬰兒らひかりもて喋りをり

われの手に殺むるためのことばあり射よわが裡の羞づかしきもの

冬の血に黙しひた降る詩のしろさやさしきものは然に匿(かくま)へる

かがやきを慎みながら永久の仔らうち震へをる 咲け 花よみな

死こそ恋ふ狂へるものに吹けよ風もしもおまへがめぐれる詩なら

かつて棄てし麗しき詩句拾いあぐ 生は然にあり 然にかなしきに

もの狂ふほどにいのちはかなしかり盲ひの鳥を名乗りたしいま

なすすべのなさへ鼓を打ち舞ひゐたり涙落つより孤独は迅し

かろうじて生かされし身を舞ひぬ手に朝餉夕餉の支度たまはり

いのちなり玻璃の呼子を吹きながらわがかなしきを駆けめぐる児ら
ひそやかにねむれる児らの頬なづる汝が眸ぬれをり世にいつくしき
君に触るゆびのためらひ人が人を生きんと希ふ夜の凜々しさよ
ゆびきりのやうに触れつつほどけゆきふと汝が微笑ふときにやすらふ
不出来の児 墜つるかはりに悲しみは翔びてゆけ星の運びに倣ひ
凍てし眼に見せたくなりぬペガサスの血のこはれつつなほも光るを
何人にもゆずれぬ領土いもうとの鳥とあそべる木下闇(くらがり)ありて
奔るより逐はれることのかなしきをきらきら逃がす万華鏡より
すみやかに愛より去りてかなしかる名もなき種をそらへ埋めたし
白薔薇みな投げ尽くしまぶしけりインティファダのあと生まれし児
獅子だ獅子に喚(よ)ばれてみると男娼の眼の冥きとき興る不死の香
画家、詩人、だれかしら娼婦描くさまものがなしきに美術書を焼く
死者のことば神のことばと云ひてやまず花紐纏れぬし妹が四肢
触れらるることにも怒り禁じ得ず禁書となりて灼かれたし、陽よ
昂れるこころもゆめぞかがやきて舞へよ舞へよと流れ墜つ星
うつくしき世の唯一のほころびかとおもう絶へざる果報享くとき
いのち灯にさびしき影絵踊らしめ人のつね吾に透きとほれるを
一字とて美へ届かざる字のなくてせめて死刑囚の字の検視
老女少女のごとき微笑みみ掌(て)の野に燃へさかるピアノ一台貴し
なによりも毒にならんと針のごときねがひ艶然なり少女らは
おそろしきものとかなしきものすでに孕みて澄めるソプラノの声
善き人の集ふ教会あとにして路傍血いろのいはけなき薔薇
人見れば地獄とおもへ画家吼ゆる吼ゆるかはりの彼の裸婦像

さざなみを纏ひてありや秘めてありや素描の竟に別る裸婦像

あきらめてしまへることの幸福に醒めることなし汝がかたはらに

泣きてまた祈りひらへり春泥の跳ねゐた妹が頬をしのびつ

真鍮の腕たよりなし両の手の皿から妹が血したたりてやまじ

雨を真似はらはら汝のうつくしき昔日永久にありて独唱(わがうた)

汝が嘆きそのしばらくは愛されよいつれ微笑はおのずからなれ

地上いづくにか光さすらし春雷のなきがらひとつ地下へ染みゆく

生きてゐるまだ生きてゐるネオン繁き都市にてだれか叫ぶを聞けり

病める児のしろきノートへうす紅の花弁をひらひ風へ手渡す

狂気、汝が眼にさびしかるみどり児を見てはかなしき歌の垂れいづ

死も毒も抱きぬるもの純粹とほろびあひつつ燃ゆ血の天(わか)さ

詩は銃も剣も持たじ旗のごとみそらに戦(そよ)ぎいのちは 青し

わが人よこころ死すもの歌はじと言ひ切るなかれ歌は途切れじ

にぎはひを逸れて真夜にぞいとほしと人群れ見つむ汝とありなむ

滾る血の黒水晶をおもはするころ汝が頬をかざる、光りて

世界屢さかさまにして鵜呑みしたる児の群れ 然し、あめが下しる

幼な等に咎はあらざり連なれる大人等のそれもかなしき

香の市に日干しされつつ少年(こども)らの蜂起覚ほゆジャスミンあはれ

ムーサらの粧ひあやしき月桃の白さうすら赤くて残酷

さまよひのあけて万緑われの手に君が呉れたる無花果一ツ

夏至の夜に秘むるめざめのある者が地上に星座なすを、君 見よ

冷やかな風渡りきて夏至祭すぎし舞手の足占(あうら)なぐさむ

歯噛みして哭き響(とよ)む児のあまたゐる砂漠も水の杯であるらし

いくたりも視しや死に触る人の眼に虹率(ゐ)る者の沓(くつ)の踊り

静かなる怒り静か過ぎてかなし喩ふれば青く塗り潰すジョット

おのが身を嘆くを愚とす美德あり其をしのぎゆく美もあまた見き

黒葡萄衣(きぬ)を落としてひかりつつ潰れやすきにしばし触れず

実石榴を挽ぎてわれらも暮らすなり絵に謳はるもまた似たる痛み

花守りも子守りも子にて天鷲絨のごと夜のとばり世にほころびぬ

曝書にもあらはれぬ名の一群れよ風は撫でよとだれか唱ふる

潰すなかれ売るなかれ愛馬風媒をして騎手 死なば霊馬を駆らん

いのち縫りて血のはなむけを織るごとし鶏頭も軍鶏もあかき色目は

思ひのほかいのちは軽しあたたかきひだまりにふる羽根とかはらし

「思ひの外」ふと口遊ぶときひらきかなしみあまた昇るドアあり

泥を観すいづくも世々の歌びとのいまに息づく地らし豊けき

愛を告ぐことばは重し地に叛き歌ひ往きたいのちのほどを

牢、頭(こうべ)の重きに等し業深きわれを狙ひて流星は来よ

かなしきは悪魔の人牢(ひとや)くろがねを粧ひて脆きかの黒雲母

あをかりし羊歯葉に疾める脳髓をやすめてゆめむアソビヲセンと

両頬を打つごとき雨うしろ背に撃たれし者と射手の頭上に

苦き日は疾風(はやて)にもあれ イリス、虹かけるとき青年に触るな

青胡桃くまなく積んで成りし城

生胡桃かなしくて落ついづくにか

虹胡桃手に手に廻しアグニの火

竜胆よ悲しめるもの愛す悪癖(くせ)

花魁草そこな少女よ幸あれと

花魁草ふるさと想ひ詩の泉

画家独り向き合ふてしづか花魁草

花魁草ふとオランピア踊りいづ

男郎花それとは知らず君は手に

純粹の沓のひびきのつめたきを秘すため踏まる花 踏まる花

純粹は亡びの律と知りてありうつくしきものみなひらりひた墜つ

イカールス墜ちてよし生きてよしといふ詞華一輪に君が成るまで

パトス繁き君に斃(たお)れし天使らのなきがら生きよそれを踏みしめ

幸あれと汝がほほえむにうなずきぬ幕降り続く曠野ただなか

ただしきをゆめこひねがふ君が眸にはかなきもののふるへしたたる

もろひとに半神視つつさまよひのあかとき汝が肌膚の恋ほしき

はじまりを疾(にく)むと言へど傷口にくちびる寄する君ぞかなしき

あるじなき馬蹄入江にしてわれを抱きつつほろぶバラッド持てり

父と子は精霊よりもはかなきに白露したたり血を凌ぎゆく

星の名に韻を添へつつ歩は軽し家路けわしくも人波に吾も

優しき歌のみ紡ぐには天(わか)すぎるその季節こそ愛でよわかもの

くちびるに触れみよ君が悲しみは歌の泉にして命なり

鐘鳴りぬありてなきかの鐘が鳴り続かむとするあらざる羽根が

月われに独りのごとく唄ひ来ぬねむれる児らのうるはしきこと

ねむれねむれ父母のねむりてなほ月の守り人のごと祈るおまへも

ねむれねむれ月燃すほどの凍て薔薇をだれしらずとも君におもへり

ねむれねむれなみだの道のやはらかに生まるる頬のひかりやさしき

ねむれねむれ夢路は遠き潮にぞ生ゆ黄金陽のかぼそき声音

ねむれねむれ夙(と)く発ちし見よしづけらきからのゆりかごめづゆびの妙

ねむれねむれゆめゆめふかきゆめに生れすべてかなしみたちはやさしき

おそろしきもののすべてにかなしみと名づけなぐさみやればあをそら

階(きざはし)にさびしきけものあやしきぬうたはば翔びぬあをきみそらに

うたはれるものらうつくしもろひとのこぞりて声音重ねあはしむ

うたはれるものとなれ夜にやすけらきなきがらたちのささやきの聴こゆ

合唱のうつくしきこといかで人の道かなしくも澄みてあれみそらは

やはらかに歯牙はねむれよゆめ人に生まれしものに揺るる 黄金陽

愛(かな)しきと汝が抱かる日の常にありゆめわするまじ常のかひなを

私は常にいませども 現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ
(「梁塵秘抄」より)

かなしかる想いはすべていとしさのゆえに今宵もたちのぼるうた

翼とは花の一種でありましよう群像に触れ微笑ふあなたの

ささやかなテロやはらかな息継ぎをそっと纏はされるあなたから

どれほどのなみだでしょうかなしみのあとにかがやくあなたのすべて

詩と歌の実験「そのだれでもないこどもは」

- だれでもないこどものおはなし

そのだれでもない子どもは、ことにふしぎなものでした。男の子とも見え、女の子とも見え、けれどもいつもどちらともつかず、あるときはまっさらな赤子のようでもあり、またあるときは、いまだ生まれ来たらぬ夢や予言のようでもありました。（途中）

- どこにでもいるこどものおはなし

だれでもない子どもがやって来て、わたしの傍へ座ります。子どもはじっとしています。そして、くちびるをきゅっと結んだきり、なにひとつ喋りません。この子どものやることといたら、いつもそれきりです。このちいさな人は、ひよっとするとことばを知らないのかもしれない。膝をかがめて、おおきくおおきく見ひらかれた目を覗きこみます。すると、黒々と濡れたその目の奥に、ちらちらちらちら絶え間なく光が点り、またそれらたくさん光が、ときに立派な鳥や獣のかたちを結びあげ、またときに、花や羽根飾りをつけた人々のすがたを結びあげながら、歌や踊りを楽しむさまがうかがえます。またたく間のショーです。これは、どこにでもいる子どものおはなしです。

- 町の灯

雨ふりの夜は、地面がきらきらひかります。「きれいだねえ、きれいだねえ」と子どもがひとり。「きれいだねえ、きれいだねえ」としきりにうなずき、うなずきながら跳ねるようにして歩きます。それを聞くものは街灯たちのほかにおりません。かれらは順に応えます。「ええ、そうですね」「ほんとうにきれいだね」「どうぞ今宵もきつとよい夜を」けれどもその子どもは、あんまりいっしょうけんめいに地面を見つめていたものですから、街灯たちのささやくのをすっかりぜんぶ聞きませんでした。「大人のような子だ」「大人はだいたいあんな風だね」「子どももあんな風だ」「人はまるで夢をみる」「古い信仰のようだ」街灯たちはしずかにほほえみます。「ひかりあれ」

童謡（みすずさん手習い）

*

いのちはひかり 星ひかり ことばは影絵 幻燈の ころは夜も あやどりで あの子のおうた 虹いろよ たそがれどきは 金いろの おうまをつれた 風がふく どの子もみんな よいゆめを みれますようにと 金いろの

*

うれしいことば すてきなことば ことばはいろいろあるけれど かなしいことばはどこゆくのもと来た場所へ帰ります なかまはずれの顔をして ひとりきりにも見えました かなしいことばもみいんな わたしの庭でありました

*

泣いていました ひとかけら ひかりはひかりを うたいつつ 泣いていました ちらちらと 月がひとりを 泣くことを ひとりきりでは ひかれずに 月のひかりは さびしそう よぞら見あげた 母さまも なみだをひとつ 落とします 泣いていました てのひらに ひかりのうたの ある晩です

*

金の野はらのみなしごら はだしでかけてまいります だれかのうちの 扉から だれかのうちの みなしごが だれが言うでもないけれど みなしごたちはじぶんらの 仕事をそっとはじめます まずはお天道さまのいる あかるいそらへおじぎして よぞらの星へひとつずつ 花の名まえをたてまつる それから痩せた町の灯へ ひとつのこらずくちづけて わけてもらったひかりもて 硝子のような笛を吹く ひかり届かぬくらがりの あの子へきつと届くよう 透けてみえない笛の音の 流れるさまは舞のよう 町にかなしい子らのいて 都市にさびしい子らのいて みなしごたちはひかりもて 天のあかしのひかりもて

*

どこかに母を恋う子のいれば もしもその子がみなしごならば わたくし母になりましょう ひとときばかり劇のよに 莫塵を敷いたらお家です ねむれるうちの夢のよに 野はらの花のごはんです それはちいさなうたでした ちいさな子らのうたでした 親の疲れてねむる夜に 星におそわるうたでした ひとときばかり 夢のよに またたく星のこもりうた

*

あるあさ 金魚が いいました あなたのそれは うんちなのおうたはうんち ときどきね 金魚のうんちも おうたです

*

ねこのしごとはさんぽです こどものしごとはあそびです おとなのしごとはおとなです おとなはおとなをがんばるために ときどき こどもをがんばります

*

かなしいきもちなぜでしょう 泣きたいきもちなぜでしょう ゆれてるお花 ゆめみる蕾 葉っぱに 貝殻 ひかりの種も みんなだいじにしてきたけれど 人の王さま泣いてます 王さまひやくにん 泣いてます きっと王さま いつも ひとりぼっちのてのひらの ちいさなおおきさしってます きっと王さま いついつも ひとりぼっちのてのひらの さびしい海をってます

*

むかしむかしの そのむかし 孔雀の子らに聞いたこと しらない風になっている だれもしらないうたがある 名もなき子らのキャラバンが ひとすじながい列なして てんでばらばら ちぐはぐな 虹のうたごえ結びます あの子はだあれ しらない子 しらない風になっている どこかで聞いた おうたの子 だからふしぎとかなしくて だれかの泣いた 昼のこと

*

まひるのみそら ましろくて ゆくえしれずの うたのよう もういいかい、と 呼んでみりゃ もういいよ、と 声がする あの子はいつも 笑ってた もういいよ、と 笑ってた なみだのゆくて よいどきに もういいよ、と ながれぼし なみだのゆくて あかときに もういいよ、と のぼら揺る

*

わたしの両のてのひらは とともちいさな歌だから こぼれたゆめの巾いに こぼれるなみだあつめます もしもなみだが海よりも きれいに月をうつせたら 月の沈んだそのあとも わたしは歌をうたうのよ (金子みすずさん「わらい」オマージュ)

ある晩、夜空の底にひとつきわめてかたく纏れた糸があり、詩人がこれを拾いあげてみるに鉛の弾か礫のごとくに思われました。糸は纏れてだまになってはおりましたが、掌の裡にあんまり重たく沈み込むものですから、そのまま肉をうがち、大地と詩人とを縫い付けてしまいそうにも思われました。

聞くに、幾歳月もかけてそうなったといいます。聞く、と申しましても、ちょうど貝殻にするようにして耳を寄せるに、これが独りで語りはじめるのです。「勘弁してください。勘弁してください。私はもう働けません。どうしたってできません。はじめからできません。」仔細を聞かずとも、そう訴える声は、なにものかにひどく脅えている風に感ぜられました。心から気の毒になり、はじめ鉛の弾とも思われた纏れた糸をあらためてじっと見つめます。なにしろ暗い晩です。けれども、もとより暗いさなか一層暗くあるものどもはきまって、ええ、そうです。きまってと言ってよいほどに、よそではけして聞くことの叶わぬしろがねのごとき声音を持つものです。噺り泣くかの声に、一条の澄んだ響きのやはりあることを聞くと、詩人は黙って月と風とを招きました。《...月齢描写...》 掌を器にして、まもなくそっと月明かりが注がれ、甘やかな花の香を連れた風が訪れます。これら静かなる訪問者たちの気配に気づき、纏れた糸は一度しんと黙りきりました。沈黙があるのですから、詩人もまた沈黙を守りたいと思いました。もっとも、こうした礼節を重んじるまでもなく、この詩人はことばを持ちませんでした。

纏れた糸は自分を拾いあげ、しかし不思議のほどことばなく佇む者の顔を見あげました。そして、その面持ちの世にも悲しげなことに今度は自分の方が詩人を哀れに思い、胸を痛めました。《...あたりをみわたす糸描写...》 掌の裡に居合わすこととなった月明かりと花の香の静けさ清らかさに、どうにも申し訳なさげによりかたくよりちいさく身を憤りました。そうして、こう言いました。「私は糸です。けれども、契約の糸です。文字を描き、それらを象り、契約の文書をはじまりからおしまいまで結びます。私はそうして、たくさんを縛ってまいりました。」一拍おいて、思い切ったように続けました。「それで死んだものもあります。きっと、あります。」